

## おしゃべり

ある土曜日の午後、仕事を終えた女三人の会話です。私たちも昨日同じようなことを話したという方もおありでしょう。また、こんなことでもなかなか同僚と話し合う機会がないという方もあるのではないのでしょうか。

〈プロローグ〉

A 「三歳児の保育時間、お弁当の有無についてどう考えていらっしゃいますか」

B 「保育時間をどうするかということ



は、単に時間だけでなく、幼児教育そのものについて考える必要があると思います。たとえばもつと母親と一緒に時間が長い方がいいとか、体力的に長い時間が無理ならば保育時間は短かい方がいいかもしれないし、友だちという時間が長い方がよければ長い方がいいというふうには……

A 「どうも今の三歳児を見ていると、お弁当のある日など疲れているようで……」

B 「ほんとうに、これだけの時間（一日

四時間）が三歳児に無理なのかしら」

A 「そこも問題だと思います。年齢の違いばかりでなく、交通機関のことも関係してくるのではないのでしょうか。幼稚園に来るまでに、神経を使いきってしま

C 「私の幼稚園も同じような問題をかかえています」

B 「地域の子どもたちが集まれば、神経を使わずに登園でき、また、家へ帰っても同じように友だちとのつながりがある。今のように、こういう交通事情の所を通うということ自体問題ですね」

A 「今ここに通っている子どもを見て、これでいいのこういう疑問にぶつかります」

B 「その子どもどもにもよるでしょうから、そこは親の判断をまつしかないと思うのですが……。たとえば、お弁当を無理にたくさん詰め込んだり……」

A 「親の態度がお弁当に顕著に現われま  
すね。大分子どもは負担を感じているよ  
うで、楽しいという反面、きれいに食べ  
るように親が言ったとか、楽しくあるは  
ずのものが、苦痛になってしまふ……」

B 「なにも全部食べて帰る必要はないけ  
れどなるべく残してほしくないんです。  
親は楽しく感じるまでの限度を、自分  
子どもに対して知っていてほしいです  
ね」

C 「私は自分がわがままだから、子ども  
に対してあまり言えないんです」

### 〈悩み〉

A 「C先生は何年勤めていらっしやるん  
ですか」

C 「私は六年目です」

A 「皆さん、頑張ってやっていらっしや  
いますね」

C 「どうしてこんなに長くやっていられ

るのか不思議なんです」

A 「六年もやっていれば、迷わずにでき  
るのでしょ」

C 「でも今、何かおかしいんです。私以  
上、十年とかそれ以上とか、どうしてで  
きるかわからないんです」

B 「結婚とかその他の理由でやめていく  
先生もいらっしやるけれど、そうでなく  
てやめていかれる先生もあるのではない  
でしょうか。私は、惰性のような生活に  
なつてきて困っているんですけれど。人  
間が変わる時期、また、変わらなくて  
ならない時期があるように思うんです。  
仕事をやめるとか、やめないとかの問題  
ではなくて……」

A 「でも、仕事を長くしているというこ  
とはやはり魅力があるからなんでしょ  
うね」

B 「魅力と感じている時と、それが負担  
になってしまふ時とありますね」

A 「この仕事は非常に大切な仕事だと思  
う反面、物を考えたり自分で見つめ直し  
てみる時間的、肉体的余裕がないから、  
ジレンマにおちいりやすいのではないか  
と思う。やらなくてはいけないと思つて  
はいても、疲れて本一つ読めない。勉強  
するにも時間的制約がある。幼稚園の先  
生は一番勉強しなくてはならないのに環  
境はまったく整っていない」

B 「毎日の生活の中でぶち当たること  
がある。それを解決する場所も余裕もな  
い。しかし毎日々は子どもを前にして  
やっていかななくてはならないため、どん  
どんつまずぎが大きくなってしまい一つ  
も解決しない。そのうち自分が飽和状態  
になり、いいやいいやで離してしま  
う。また、最初から同じことを繰り返  
し、徹底的に問い直すことができない」

A 「Oさんのように、つまずいたからス  
パッとやめて勉強をし直す。そこで改め

て幼稚園の先生になりたいと思ったんだ  
そうです。勉強し直したことがよかった  
というだけでなく、子どもと離れた生活  
をしていると、子どもがなつかくなって  
くるんだそうです」

B 「そういうなつかしくなるという気持  
ちが大切だと思うんです。われわれに  
は、子どもを目の前にして、どうにかし  
なくてはという変な責任ばかりが積もっ  
ていってしまう」

A 「自分一人で考えを煮つめてしまわな  
いで、本を読んだり、外へ出ていろいろ  
のお話を聞いたりすることが大切だと思  
う。直接的には解決できないかもしれない  
が、広く考えられるようになると思  
う」

C 「Oさんが、今子どもがなつかしいと  
いう気持ちだが、再び幼稚園に戻っても、  
そのままかしらと疑問に思うんですけ  
れど……」

B 「今持っているということが、すばら  
しいと思います。再び中へ入っていつ  
ら同じかもしれないけれど、そこに一  
乗り越えたものがあるのではないでし  
ょうか」

A 「一度やめてみるという方法がいい悪  
いではない」

B 「続けていくことで、自分なりに何か  
を見つけていく人もあるかもしれない。  
しかしそれは大変むずかしいし、時間

がかかるし、その前に肉体的にも精神的に  
も挫折してしまうのではないかと思  
う」

A 「その意味でも、現場の人が勉強でき  
る場が、もっとほしいと思う」

B 「現職研究会は、その点では逃げ場  
になっていないわね」

C 「そうですね」

B 「でも、やはり解決にならないのね。  
ある程度は話の中で出ているけれども、  
自分自身で見つけなければ、どうしよ  
うか」

もないことなのね」

A 「そのために勉強が必要でしょう」

B 「机の上の勉強ではなくて、気分転  
換、全く違うことのできる余裕がなく  
はと思います。行き詰ったら早く本を読  
まなければとか、克服する手段を探す  
か、こんなことをしては、ほんとう  
の解決にはならないと思うのです」

C 「勉強という方法でなく戻れるもの  
があるような気がする」

A 「人の話を聞くのもいいし、映画を  
みて感動することでもいい」

B 「通勤電車の中で、すてきな人いな  
いからでもいいのに、いつも仕事のこと  
で頭がいっぱいになっている」

A 「悩むということは、前進する何かに  
なるのではないかしら」

B 「悩みをもつこと、スランプのよう  
なものも同じようにあるわけではな  
く、波があると思います」

A 「ほとんどの先生が、同じように感じているのでしょうか」

B 「私も今のようになんか底にある時と、時期を越してしまうと、何もなかったように過ぎていってしまう。それが幼稚園の生活の弱さだと思います」

C 「毎日できてしまう、何かひっかかっているけど保育は別の所で過ぎていく」

〈われわれに つぎのこと〉

A 「幼稚園の中で研究会みたいなものを開いてみたらどうかしら、フレーベル・ペスタロッチについての本を読む機会を一週間に一回とか、一カ月に一回とか開いて、その時に、それぞれの先生の心の思いを出し合ったらどうでしょう。それをきっかけにして話をするだけでも、人間楽になるでしょう。そして、自分のコンディションを整えていく必要があるでしょう」

B 「そうですね。やれ疲れた、気分が悪いでは決していい保育はできない。できる人はいいけれど、できない人は自分で時間を調節するとかして、体調を保つ責任はあるでしょう」

A 「幼稚園から一歩外へ出ても、仕事のことすべてで頭から離れてしまうわけではない。この世界って不合理の世界なんじゃない」

B 「その不合理のよさもあるのではとも思うのですが、不合理でのよさと悪さの区別が私にはつかめないんです。それは一人一人の考え方によって違ってくると思うし、その違いも大切にしなければならぬ。けれど同じ時代に生き、同じ日本人であるならば、もう少し共通点を確かめ合ってもいいようにも思えます」

A 「最初からからにとじこもってしまわないでどことなくだらしないことでもいいから情報交換ができるといいですね」

C 「毎月一回、区の研究会があるんですけど、そういうことは出てませぬね、友だち同士で話し合い、お互いなくさめあたりしてそこだけで終わってしまおう。進歩がないですね」

A 「それが日本人の悪いくせだと思えます。〇〇運動みたいに文句を言ってなくさめ合うけれど前向きには何もしていない。そうではなくて、われわれのできる範囲で行動を起こさなくては」

〈初心に帰る〉

C 「同じに忙しくても新卒のころの忙しさと違いますね。そのころは、ほんとうに時間がなかった。だけど、今みたいな心境にはなっていないかった」

A 「物足りないんですよ。充実感がないというのかしら」

C 「自分のやってきたことがいいのかしら、これがほんものかしらと思ってく

る」

B 「失敗は失敗でいい、それなりの充実感があると思うが、慣れてきてしまふと、ある程度のところまではいくようになる。そしてその先がわからない、自分には新卒の時と違った迷いが出てくる」

A 「そこが、これから一つ飛躍するものになると思うけれど、だから、それをうやむやにははいけないとおもう」

B 「そこで何をしたらいいかわからない」

A 「そうするといらだちがくるでしょう？」

B 「そうなんです、いらだちがくると、忙しく感じるようになる。精神状態がゆっくりにしていませんね」

C 「そんなことを考えていなければ、一生懸命何かをやっているんでしょうけれど」

B 「若い先生は、若いなりに精一杯とい

うのがあるでしょう。技術がどうこうで

はなくて、子どもに伝わっていくものだと思う。私にはそれがいいみたい」

A 「そこが大切だと思う」

〈一人の人間として生きる〉

A 「先生稼業にとっぷりつかって子どもを追いかけるのではなく、自分の人生をもっと大切にしなければいけないと思う」

C 「生活がかかっているからやめられない人もいるでしょう。多少の難関もいやいやですごしていく、私はそうはなりたくありません」

B 「そんなことをしてまで女の人が働く必要があるんでしょうか」

A 「子どもを犠牲にすることはないし、他にもいろいろの職業があるのだから」

B 「自分のサイクルで生きるということは大変なことですね」

A 「自分を殺して他が生きがいに生きた時、ふとわれに帰った孤独感のようなものがあるのではないかしら」

B 「自分が生きていくことを見失って、子どものためにと無我夢中でやっていたら、宙に浮いたもの、もしかすると自己満足の段階で終わってしまうかもしれない」

A 「宙に浮かないためにも、先生自身の生活に主体性をもつと、何かが見えてくるのではないかと思う」

C 「私はそういう意味においても、自分のことを考えてる時期なのかと思う。このままこの仕事を一生やっていくのか、もしやめたら何ができるのか、そう考える余裕も出てきたように思います」

A 「旅行をしたり、気分転換をして先生自身が生き生き生活できるようにしなければ」

C 「ほんとうにそうですね。子どもに生

生き生きせようとしているのに先生が生き生きしていなければ」

A 「自分の感情を打ち込める何かを見つけるといいとおもう。大人にとって魅力のある人は子どもにとっても魅力がある」

### 〈子どもを見る〉

B 「子どもにとってほんとうに自由であるということとはどんなことかしら」

A 「へたなテクニックをふりまわさないことかしら」

B 「子どもに対する学問がひとつも入っていない先生でいい先生がいますね」

A 「本質的に子どもを素直にみる目があるのかもしれない」

B 「私のように悩みを持ち、迷いながら子どもを見ていると、子どもの見方も変わってくるようです」

C 「子どものことばや動きがとらえられ

なくなる。以前は、小さいことでも心に感じられていたのに……。それを他の先生方にも報告できていたのに今は、聞こえないんです。耳があっても聞こえてこない。今他の先生に子どものことで話す話題がない。他の先生から見れば、以前も今も同じことを言っていると感じているかもしれないけれど、自分では、とらえ方が違ってきている」

B 「私はそこにも気がつかず、どうして自分のクラスの子どもには、そういうところが無いんだろうと思っていた。自分が聞く耳を持たないのにも気づかずに」

A 「感受性がなくなっているからね」

C 「自分のコンディションがいい時は、努力しなくても入ってくるでしょ？」

A 「一見子どもを見ているようでも、見えないという状態があるんでしょね」

C 「観察の目みたいな感じでは見えている

と思うし、誰が何をしたということはおぼろしく、書いたりはできるのですが、どこか違っているように思う」

B 「もっとお互いに感受性豊かに話し合えるといいですね、教師一人一人が見る子どもに何か共通のものを見つけることによって、こんどは、われわれ教師側から子どもの見方を考えていく」

A 「子どもに対する価値感のようなものは違ってもいいと思うけれど、その違いを全部出し合うことによってお互いを確かめ合う。実際にはその時間もないんだけれど……」

### 〈教師の役割〉

A 「学校の先生というものは、とてもさびしいと思うのです。たとえば大学生は、二年なり三年なり一緒に勉強し、その時は同じに歩いていてもどんどん追いついていってしまう。それは望むことで

はありながら、反面さびしきを感じます」

B 「幼稚園においては、そういうさびしさはないんです。われわれがやっていることをふみ越えていってくれるものかどうか、さびしきよりもあせりを感じます。今、一生懸命やっていることが、ほんとうに先にいって役に立つものかどうか、ふみ越えていく何かになるかどうかの不安があります」

C 「全部無駄じゃないかしら……？」

B 「大きい人だと、すぐに外部からの評価が得られるけれど、幼児は、今すぐのものではなく、将来においての反応であると思います」

A 「幼稚園とは、いろいろの子どもが集まって構成されているわけで、能力的にも、上から下まですべての子どもがいる方が、伸びるんだそうですね」

B 「ダメだと言われている子どもでも、

その子ども一人の人間だから、必ずどこかにいいところがあるわけですね」

A 「そのように、われわれが手をふれる以前の教育のことも考えてみるとむずかしいですね」

B 「先生が教育できる範囲はある程度で、子ども同士で学んでいくものもたくさんあるように思います」

C 「せめてわれわれのできることは、毎日を生懸命生きること、私は、自分の子どもを育て自分も子どもと一緒に生きたい。われわれが扱う子どもは、もうある程度育つという見込みのついた子どもと言えると思うのです」

A 「教育者面（め）をしているのではなく、泥にまみれて生きるという経験をすることにより教師は教師なりに、子どもは子どもなりに、人間観のようなものを確立していくのではないしょうか」

A 「先生の実際に動ける役割は、徹々た

るものではないかと思う。薬味みたいなものなのでしょう」

B 「その薬味がきかないと、まづいものになってしまうでしょう。その薬味のよし悪しを、子どもは正直に出してくれている。そこを見ると、保育者の重要さ、比重の大きさを、つくづくと感じるので、私のように力のないものは、とても不安になるのです」

C 「いろいろなことがあります、その瞬間々々で、あまり一喜一憂せず、すこしでも、楽しい日々が送れるように、お互い頑張りましょう」